

『平家物語』における源行家

佐 倉 由 泰

目次

- 一 問題の所在
- 二 作品世界の表層を滑る行家
 - (1) 東国を巡る行家
 - (2) 墨俣合戦における行家
 - (3) 頼朝の許を出奔する行家
 - (4) 行家の入京と出京
 - (5) 室山合戦とその後の行家
 - (6) 作品世界の表層を滑る行家
- 三 行家の最期
- 四 『平家物語』における行家

一 問題の所在

『平家物語』の物語性は、表現上、または人物形象上のきわめて明確な関係性の綾によって支えられている。表現面では、異なる形質の叙述の併存、連接が認められ、これは、話題の転換や、叙述上の視点移動、焦点のずらしや、表現上の遠近法などにかかわって、『平家物語』の内容の多様性と緊張感、表現の運動性をもたらしている。人物形象においては、登場人物間の対照的、あるいは、相補的な関係性が現れており、作品世界の構図、ストーリー展開、物語

内容を決定付けている。異質な叙述間の関係性の問題と、登場人物間の関係性の問題とは、当然、没交渉ではあり得ないのであるが、本稿は、特に、後者に注目して考察を行う。

そこで、登場人物間の関係性から捉えられる『平家物語』の物語性の綾を概観してみたい。平清盛と平重盛、この父子間の、悪—善、動—静という対照的な描き分けは、平氏滅亡を招来する者と、それを警告しつつも、解釈し、予告する者との間の相剋を伴って現れ、その緊迫した両者の言動は、機能的には、相補的關係をとり結んで、悪因—悪果という、ストーリー展開上の強固な枠組み、構図を敷設する。重盛と宗盛、この賢兄—愚弟と要言し得る、対照的な関係構図の設定は、重盛の没後、その地位に宗盛が立つという交替をもつて、平氏滅亡の必然性をより明確化する。宗盛と知盛、この兄弟間の、愚—賢、臆—剛と要言し得る対照的な描き分けは、宗盛が平氏一門の中で一身に負の要素をかかえ込む暗部として疎外される一方、知盛が一門の中での精神的支柱として中心化する役回りを与え、表現上、宗盛が犠牲になる形で、知盛がすぐれた武将として、さらには、平氏一門がすぐれた武門として美化される結果をもたらす。このような『平家物語』の平氏没落の物語としてのプロットにかかわる人物の描き分け以外にも、源頼朝と木曾義仲、源範頼と源義経というような対照的な描き分けが認められる。

これまで述べてきた人物間の対照的な関係は、物語内の機能とい

う観点では、二人の言動が相補的、相互依存的に働くことになるが、機能面だけではなく、人間関係それ自体が相補的であるような形の人物の描写が、『平家物語』の人物形象の中心をなしており、作品世界に豊富な物語性をもたらしている。相補的な人間関係とは、親子、兄弟、主従というような、相照的に互いの存在性を規定し合う関係のことである。『平家物語』には、この相補的な関係にある人物が、その相手の存在を自らの存在の拠り所とするような場面が実に多く認められ、『平家物語』を享受者の共感、感動、同情を誘う物語たらしめている。作中、負の要素をかかえ込み続けた△暗部▽としての宗盛も、清宗、副将という子の存在があつてこそ、子を思う父という類型において存在の重みを持たされて^(注4)いる。藤原成親が山王の怒りに触れていることも省みず、「非分の大將」を望んで自滅した存在としてのみに終始しないのは、成経、北の方、幼い子たちとの関係と、互いの深い思いが描かれて、成親に夫として、父としての存在性が付与されているからである^(注5)。義仲と今井四郎兼平は、互いに相手の存在を生を生の拠り所として最期を迎える。子の景高、景季の存在なくして、梶原景時の生田の森における「二度の懸」はあり得ず^(注7)、子の直家を持たずして、熊谷直実の出家はあり得なかつたことになる^(注8)。「見るべき程の事は見」おおせた知盛も、乳母子の伊賀平内左衛門家長と一所に入水することを求めるのである^(注9)。このように、『平家物語』に登場する多くの人々は、相補的な関係性にとづく行動と心情が表現されており、互いに相手の存在を生を生の拠り所とする形で自己の存在意味が現れている。登場人物の存在性が相照的、相互依存的な人間関係において規定されているのである。

以上述べてきたように、『平家物語』の人間関係は、対比的な明暗であれ、相補的な相照であれ、相互依存的に個々の人物の存在意

味、存在性を規定し合うものとして現れている。そのような対比的であるいは、相補的な関係を持たずに登場する人物は、作品世界において端役としての役回りしか与えられていないと言つても過言ではないようにも思われる。しかしながら、本当に、端役としてではなく登場し、他人の存在に依存せずに自己存在を主張するような人物は『平家物語』にはいないと断言できるのであろうか。もしも、そのような登場人物がいるのであれば、その人物は、物語の構築性の強化に力を貸すこともなく、類型の鋳型にはめ込まれることもなく、無常観や特定の倫理観につなぎ止められることもなく、作品世界の空隙を突いて特異な運動の軌跡を描き、そこに『平家物語』の特異な一面を切り拓く機能を確保していることになるのではないか。このような稀有な人物を作品世界のうちに捜し求める中で、問題にしたいと考えるに至つた人物が、源行家である。

源行家。『平家物語』における彼の存在は端役に止まるものではない。が、ストーリー展開の推進力として機能することはほとんどないと言つてもよく、強い倫理観や情念にとづく印象的な言動も認められず、捉えどころがなく、いわく言いがたい印象を与える地味な存在である。『平家物語』を読んで、行家に特別に注目するという向きはほとんどないのではあるまいか。そのためか、行家の人物像に言及して『平家物語』の性格を捉えようとしている考察も少ない。私が「捉えどころがなく、いわく言いがたい印象を与える地味な存在である」行家に注目するのは、彼の捉えどころのなさ、いわく言いがたいところに関心があるからであり、その捉えどころのなさを捉え、いわく言いがたいところを言葉にして、『平家物語』の看過されやすい一面を明らかにしたいと思うからなのである。

なお、本稿は、『平家物語』の多様な諸本の中で、寛一本を中心

にして、適宜、屋代本、延慶本、長門本、源平盛衰記等の他本についても言及しながら考察を進めて行く（本稿で、特に断ることなく、言及、引用する『平家物語』の叙述は覚一本の叙述である）。

二 作品世界の表層を滑る行家

(1) 東国を巡る行家

『平家物語』において、行家の存在が最初に現れるのは、覚一本で言えば、巻第四「源氏揃」の段で、以仁王に平氏打倒の拳兵を勧める際、源頼政が各地の源氏の人々の名を上げる中で「熊野には、故六条判官為義が末子十郎義盛とてかくれて候」と述べられている。行家は、この時まで、義盛と名のついていたとされるが、保元の乱（保元元年八一五六）で斬首された源為義の十男で、生年は未詳。『保元物語』によれば、為義の九男、為仲の年齢は記されていないが、保元元年に、八男、為朝は十八歳とあり、また、義盛の異母弟と考えられる、乙若が十三歳とされている。『保元物語』の記述を信ずれば、数え年で十八歳の為朝は保延五年（一一三九）の生まれ、十三歳の乙若は天養元年（一一四四）の生まれということになり、義盛の生年は、永治元年（一一四一）から康治二年（一一四三）頃ではないかと考えられる。義盛が、保元の乱にどのようにかかわったのかは明らかではないが、三年後の平治の乱には、『平治物語』によれば、長兄の義朝に従う形で参戦しており、義朝の子、頼朝に会うこともあったのではないか。平治の乱での敗戦後は、熊野を主たる拠所として、平氏の興隆、栄華の時代を世間に隠れるようにして過ごしていたのであろう。

作中では、そのような義盛の存在が、頼政の言葉のうちに示された後、頼政の勧めに、以仁王が同意するや、義盛には、各地の源氏に平氏打倒の拳兵を促す、以仁王の令旨を伝える役割が与えられることになった。覚一本では「熊野に候十郎義盛を召して、藏人になさる。行家と改名して、令旨の御使に東国へぞ下ける」（巻第四「源氏揃」と、その事情が記されている。ここで言う「藏人になさる」とは、『吾妻鏡』の記述のごとく、以仁王を後見していた、八条院の藏人に任じたことを示しており、以後、行家は「十郎藏人」と呼ばれることになる。覚一本によると、以仁王の令旨を帯した行家は、治承四年（一一八〇）四月二十八日、東国に向けて出発する。行家、満年齢では三十代後半のことと思われる。

ところが、『平家物語』の記述に従うかぎり、以仁王の令旨を伝える人物として行家を抜擢したことは、以仁王、頼政に計画の挫折をもたらす。行家、および、熊野新宮の動静から密計が漏れ、結局、平家の知るところとなり、以仁王と頼政は、各地の源氏の拳兵を待たずに兵を挙げざるを得なくなったからである。それは明らかでない誤算であり、結果的には、行家の抜擢が計画を失敗に導く形になった。

治承四年五月二十三日、以仁王と、頼政の一族・郎等は、宇治川の合戦に敗れて戦死した。同じ頃、行家が東国のどこにいたのかは定かではない。覚一本では、近江、尾張、美濃の源氏に、以仁王の令旨を伝えた後、行家は、五月十日に伊豆国の北条に到着、そこで甥の頼朝に令旨を渡すと、常陸国信太の浮島にいる兄、義憲の許を訪れ、さらに東山道に赴いて、甥の木曾義仲に令旨を伝えたとされている。なお、延慶本では、行家は五月八日に伊豆の北条に到着、頼朝に令旨を渡すと、頼朝は自らの名で、各地の源氏に対して、以仁王の命を受けて拳兵をするよう勧める旨の書状を送ったとされて

いる。頼朝を源氏の中でも別格として捉える記述となっている。その後、行家は、義経に令旨の趣を伝えるために奥州に向かったという。また、源平盛衰記では、行家は、四月十日に山伏姿で東国に向けて出発、近江源氏、美濃、尾張の源氏、信濃源氏、甲斐源氏を巡って、令旨の案書（控え）を渡した後、頼朝には、特に、令旨を渡し、続いて、常陸の兄の義憲、佐竹にも案書を渡して、義経のいる奥州に向かったとされている。特別に令旨を受け取った頼朝が、各地の源氏に書状を送ったことについては延慶本と同様である。

このように諸本の異同は認められるものの、行家が実に長い道程を巡って、一族の人々の間を横断したことについては変わりはない。この時、行家には、彼に従う同行者がいたと考えるのが自然であろうが、諸本は揃ってその存在の暗示すらしておらず、『平家物語』の表現上、行家は、ひとりで作品世界の表層を遠くはるかに横断したことになる。

ところで、行家が携えていた、以仁王の令旨は、歴史上、東国各地の源氏に拳兵の根拠を与え、治承四年の秋から、頼朝、義仲を中心に巻き起こる全国的な動乱を促したという点できわめて重要である。したがって、行家も特筆すべき重要な歴史的役割を果たしたことになるのであるが、『平家物語』では必ずしもそのようにはなっていない。なぜならば、作中、頼朝の拳兵を直接に促したのは、文覚の勧めと、何よりも、文覚の活躍によって頼朝の許にもたらされた、後白河法皇の院宣であるとされているからである（巻第五「福原院宣」）。後白河法皇から頼朝に平氏打倒を命ずる院宣が与えられたという、頼朝の拳兵を正当化するための虚構が、『平家物語』における以仁王の令旨の存在意義をきわめて稀薄にしており、行家の役割の重要性は文覚に奪われる形になっているのである。また、義

仲が拳兵を決意したのは、「日本国二人の將軍と言はればや」と望んだからであるとされており（巻第六「廻文」）、行家のもたらした以仁王の令旨との因果関係は示されていない。頼朝、義仲以外の源氏の拳兵についても、以仁王の令旨がそれを促したという記述はない。したがって、作中、行家の、令旨を伝えた行為は、彼の周囲から、以仁王の計画が漏れたというマイナス面を補うには至っておらず、彼の令旨を伝える行動も、作品世界の深層を揺るがすことなく、表層を滑っただけに過ぎないことになってしまっている。

(2) 墨俣合戦における行家

出京して東国各地を巡った後、行家が再び登場するのは、巻第六「祇園女御」の段である。治承五年（一一八一）三月中旬、行家は、頼朝の弟（義経の同母兄）の卿公義円（屋代本は「卿公延清」、延慶本、長門本は「卿公円全」、四部合戦状本は「卿房義慶」とする）とともに大將軍として、源氏軍六千余騎を率いて、尾張国を越えて美濃国に迫らんとする勢いを示すが、尾張川（墨俣川）で、渡河し、平氏軍三万余騎と戦うが敗退、行家は「からき命いきて、川よりひしがしへひきしりぞく」ものの、義円は「ふか入して討たれ」てしまふ。これがいわゆる墨俣合戦で、作中、源氏方の敗北について、ある人が、「水駅スイエキをうしろにする事なかれとこそいふに、今度の源氏のはかりことおろか也」と語ったとされている。戦法の誤りの指摘が現れるように、行家にとっても不名誉な敗戦であった。しかも、墨俣で敗れた後、行家は平氏方の追撃を防ぐすべもなく三河国まで敗走し、矢矧川で防衛線を構えるが、ここも破られてしまふ。ただし、平氏方も大將軍の知盛の病いによって、それ以上の追撃をせず、に帰京したとされている。が、行家が敗退を繰り返したことに違い

はない。

この一連の合戦についての覚一本の記述は多分に簡略であり、ある人の源氏方の戦法の誤りを指摘する言葉が現れる他は、行家に対して特に批判的な表現がなされているわけではない。その簡略な表現から、あえてこれ以後の作中における行家の形象につながる問題点を探るならば、彼が合戦に長じておらず、味方の武將との協調的な連携を欠き、ただ、逃走の段になると、個人的な武の技量にすぐれているためか、我が身は無事に敵の追撃をかわしおおすというあり方を見ることができないのではないだろうか。

そして、墨俣合戦が始まる、この一連の戦いについて詳述している延慶本、長門本、源平盛衰記では、ここに挙げた行家の性格がはっきりと現れている。三本のうちの延慶本に例をとると、行家と卿公円全は、おのおの千余騎を率いて互いに間二町を隔てて陣をとり互いが相手よりも先に平氏方に攻め込もうとしていたが、円全は、「十郎藏人ニ先ヲ懸ラレテハ、兵衛佐ニ可面合一カ」と思い、ひとりで平氏方の陣に向かい奮戦するが討ち死にする。このことを知らぬ行家は、「卿公ニ先ス、マレジ」と思い、配下に円全の陣を探らせるが、円全が不在と聞き、あわてて墨俣川をこえて平氏の陣を攻撃し敗退したのである。同軍の將としての協調、叔父甥の間の親しみの情の窺われぬ、行家と円全との関係が現れている。敗れた行家は、わずかに主従二騎となり、今度は墨俣川を東に向かつて越えることになる。その姿は次のように表現されている。

赤地ノ錦ノ直垂ニ、小桜ヲ黄ニカヘシタル鎧ニ、鹿毛ナル馬ニ黄伏輪ノ鞍置テゾ乗タリケル。東ノ河ニ付テ、鎧ノ水ハタノト打アユバセ行ヲ、大将トハ見ケレドモ、平家無左右ヲハザリケリ

大将にふさわしいでたちであり、馬を「打アユバセ行」という悠然たる退き方に恐れを知らぬ自持がうかがわれる。その雰囲気は呑まれ、平氏方は、大将とは知りつつも功名心も失せて追いつかなかったということ、この表現はもの語っていると思われる。行家のすぐれた武人としての資質、技量は以後も逃走の場面に現れる。さらに、延慶本、長門本、源平盛衰記において、行家は、ただでは負けないところも示す。墨俣川で敗れた後、行家は、小熊、柳の津、熱田、矢作川の各所で陣を構えながら、平氏軍によって次々に破られるが、矢作川での敗退後、行家は一計を案じて、雑色三人を旅人の体に改めさせ、平氏方の陣の方へ向かわせる。その際、平氏方に源氏方の様子を問われたら、頼朝の率いる大軍が迫り、行家の軍とひとつになろうとしていると告げるよう言い含めておいた。もちろん、頼朝の率いる大軍のことは虚言に外ならぬが、雑色たちは、行家の指示を実行し、その言葉を信じた平氏方はあわてふためき、京に向かって逃走を始めた。行家の窮余の一策が功を奏したのである。その上、行家は、これに追い打ちをかけるために、「美乃尾張ノ者共、平家ヲ一矢ヲモ射ザラム者、源氏の敵」という脅迫的な命令を触れ回らせた結果、平氏方は源氏に志ある者たちによって、応戦もかなわぬままに追撃されたという。

この一連の行家の計略については、すぐれた奇策と捉える向きもあるが、狡猾きわまりない謀略と捉える向きもあるが、少なくとも一筋縄では捉え切れぬ、何やら得体の知れない行家のあり方が看取されるところである。ここでの平氏撤退の理由を、覚一本等は大将軍、知盛の所労に求めているが、これは事実と異なる。ただし、行家の計略を平氏撤退の理由とする延慶本等の記述も、どの程度の真実を含んでいるのか定かではない。事実の程はどうであれ、ここ

で、延慶本等が、捉えどころがなく、いわく言いがたい人物として、行家を物語的に形象していることは確かである。

行家のいわく言いがたいところは、褒められているのか、批判されているのか不分明なところでもある。そのどちらでもないような表現の中で、行家は大きく状況を改変するわけではないが、相手や周囲をかき乱す、独自の行動を展開する。この行家の独特の行動性は、これまでに見た一連の合戦の場面を含めて、諸本間の表現の疎密の問題を超えて、『平家物語』の行家のあり方において通底する。作中での彼の行動は、得体の知れぬ、いわく言いがたさを感じさせるのである。尾張、三河での戦いの後のこと、延慶本、長門本、源平盛衰記では、行家が、「三河国ノ国府ヨリ、伊勢大神宮へ願書ヲ奉_{（願書）}奉」ということが記されている。彼の敬神の念を示す記述ではあるが、同時に、願書の内容には、自身と、強大な家臣団を擁する頼朝とを対等と捉える意識が認められる。この自恃の意識が周囲を新たにかき乱して行くことになる。

(3) 頼朝の許を出奔する行家

次に、行家のことが作中の話題に上がるのは、巻第七「清水冠者」の段においてである。そもそもこの段で語られていることは史実とは認めがたい。寿永二年（一一八三）春、頼朝が義仲を討つべく自身で十万余騎を率いて信濃国善光寺まで出兵したとは信じがたく、そのことを裏付ける史料もないのである。ただし、頼朝が義仲に対して警戒感を抱き、義仲の方で頼朝との不和を解消するために、嫡子清水冠者（寛一本等では、名を「義重」、延慶本等では「義基」、『吾妻鏡』では「義高」と記しているように、諸本諸書で名が異なる）を頼朝の許にいわば人質として遣わしたことは事実であろう。

確かに、北陸道での義仲軍と平氏軍との合戦以前に、頼朝と義仲との間の不和があったと考えられるが、『平家物語』はその不和に行家がかかわっていたとしている。寛一本では、それをあまり明確にしていないが、頼朝との戦いを避けるために、義仲が今井四郎兼平を使者として頼朝に意趣なき旨を伝える際、その言葉の中に「但十郎藏人殿こそ、御辺をうらむる事ありとて、義仲が許へおはしたるを、義仲さへすげなうもてなし申さむ事、いかんぞや候へば、うちつれ申たれ」というくだりがある。これは、行家が恨みを抱いて頼朝の許から出奔し、義仲の陣営に身を投じたという事情を示しており、義仲が頼朝に対する弁明の中でことさら行家のことに言及しているのは、頼朝の自身への敵視の原因が行家の存在、行動であることを意識していることをもの語っている。義仲は、頼朝と反目するに至った行家を受け入れたことを強く気にとめているのである。しかし、義仲は、頼朝との和解に際して、行家の処遇を改めることなく、十一歳の嫡子、清水冠者を頼朝の許に遣わす。行家は、甥の頼朝と協調し合えずに、義仲を頼り、それが頼朝と義仲との間に溝をつくるばかりか、この従兄弟同士の間で危機的状況をもたらしたのである。それにもかかわらず、義仲は、子を犠牲にする形_{（注23）}で、叔父を庇ったことになる。

寛一本では、このように、叙述の断片のうちに行家の動静とその意味が示されているのだが、延慶本、長門本、源平盛衰記においては、そのことが詳述され、明示されている。この三本は、頼朝と義仲の不和の原因として、武田信光が義仲を恨んで頼朝への讒言に及んだことも挙げるが、もうひとつの原因が、頼朝と反目し合った行家が義仲を頼んで出奔したことであると、これを明示している。それについては事の始まりから詳述されている。三本の中で延

慶本に例をとって見てみると、行家は、相模国松田御所で暮らしていたが、所領をまったく有しておらず、「近隣ノ在家ヲ追捕シ、夜討強盗ヲシテ世ヲスゴシ」ていた。そのため、ある時、行家は頼朝に次のような文面の書状を送る。

行家ハ御代官トシテ、美乃国墨俣ヘ向事十一度、八ケ度ハ勝テ三ケ度ハ負ヌ。子息ヲ始トシテ、家子郎等ドモ多ク打トラレテ、歎申ハカリナシ。国一ヶ所預タベ。是等ガ孝養セム

戦死した子息、家子・郎等の供養のために所領を望むという趣旨は、理にかなっており、同情を誘う内容であるが、国一國を預けてほしいというのはその趣旨においては法外であろう。この趣旨自体にいつわりはないとしても、これまでの延慶本に現れた行家の言動からしても、国一國を預けてほしいとする理由はそればかりではないことをうかがわせる。また、自身が頼朝の「御代官」として戦ったと見ているのも、先述の、伊勢大神宮への願書で、頼朝を自身と対等と見ている点からしてもどこまでが本心であるのか疑わしい。さらに、墨俣で十一回戦って、八回勝利し、三回は負けたというのも、以前の作中の記述には、行家の勝ち戦が一度も認められぬため、この歴戦については、どのような戦をどのように数えていることなのか定かではない。この書状に対する頼朝の返事は即座に到来するが、自力で国をとればよいという旨のにもない拒絶が記されていた。それを見て、行家は、「兵衛佐ヲタノミテ、ヨニ有ムコトコソアリガタケレ。木曾冠者ヲ恃ム」と、千騎の軍勢を率いて信濃に向かったという。

叔父の窮状に対して一切救いの手をさしのべようともしない頼朝も頼朝であるが、窮するがゆえとは言え、近隣の在家の「追捕」、

「夜討強盗」を行うに及び、戦死した身内の供養のためとは言え、国一國を要求し、その要求がかなわぬとなると「ヨニ有ムコト」を期して甥の許から別な甥の許へと出奔する行家も行家である。行家出奔の事情を語る延慶本の記述は、必ずしも行家に対して批判的な表現がなされているわけではないが、行家の協調性のなさ、無軌道さ、発言のどこまでが本当か嘘か弁別できぬような得体の知れないところなどが捉えられている。

ただし、反目し合うに至る、頼朝、行家両者の言動が、このとおり事実であったのかは別な問題である。たとえば、行家が、「夜討強盗」まで行ったという記述も、保元の乱で敗れた後、潜伏中の為朝が、ひとり従っていた郎等に「打入、をし入せさせて、明しくらし」ていたとする『保元物語』（金刀比羅本等。半井本等にはこのような記述はない）の記述と、どこかでかかわりを持つ脚色であるとも考えられる。また、頼朝と行家とが協調し合えなかったとも言っても、そもそも頼朝にとって行家は支配下に属し切らぬ、かなり独立した存在であり、行家の側でもそれを望んでいたのではないだろうか。行家が、墨俣まで進出して、平氏に対する源氏方の前線を構えていたのも、彼独自の美濃、尾張の源氏との連携を生かした動きとも考えられる。実際、墨俣合戦に参戦し戦死した人物として、尾張源氏の和泉太郎重満（『吉記』、延慶本、長門本、源平盛衰記、四部合戦状本）、重満の弟、高田太郎（『吉記』。源平盛衰記は、「高田四郎重久」とする）の名が挙げられている。また、源平盛衰記の記述に信を置けなければ、後述する室山合戦において、尾張源氏の山田二郎重弘は、戦いの中で終始、行家と行動を共にし、美濃國の武士、おり（と）の六郎重行も行家方として参戦し、戦死している。行家は、以仁王の令旨を携えて各地を巡った折の縁からか、美濃、尾

張の武士たちと独自の強い結びつきがあったのではないか。そして、延慶本等の記述に史実の影を認めようとするならば、墨俣合戦において、頼朝が、弟の円全に「十郎藏人ニ力ヲ付ヨ」と「千騎ノ勢ヲ付テ差上タリケル也」とあるのは、実は、自らの代官として円全を参戦させることによって、行家の影響力が美濃、尾張にまで及んでいることを牽制するとともに、自らの支配力が美濃、尾張にまで及んでいることを在地の武士たちに知らしめるという意図があったのではないか。だからこそ、行家と円全は陣を隔てて、互いに先陣の功を焦ったとも言えよう。円全の「十郎藏人ニ先ヲ懸ラレテハ、兵衛佐三可面合カ」という思いも、行家の「卿公ニ先ス、マレジ」という意識も、そのような事情を反映しているのではないか。先述の、伊勢大神宮に奉納された願書においても、行家は、自らと頼朝とが対等であると意識していたように、ともすれば独自の勢力を築こうとする行家が、頼朝との、あるいは、円全との協調を欠いたことには必然性があったと思われる。

さて、行家出奔後の延慶本の記述に戻り、ストーリーの展開を見ると、それを知った頼朝は、「十郎藏人ノ云ワム事ニ付テ、木曾冠者、頼朝ヲ責ムト思心付ナムズ。襲ワレヌ先ニ木曾ヲ討ム」と、行家はもちろん、義仲に対しても強い敵愾心を抱くことになる。さらに、折節、甲斐源氏、武田五郎信光が、義仲と平氏が結託し頼朝を討とうとしているということを頼朝に告げたところ（後に、作中で、信光が義仲を恨んでの讒言であったことが明かされる）、信光の言葉を信じた頼朝は、覚一本の記述と同様、十万余騎の軍勢を率いて信濃に向かったという。頼朝は、事の実否を正すべく、天野藤内遠景を使者として義仲の許に遣わすが、その際、平氏と結託する意図がなければ、行家、もしくは、行家が拒んだ場合

は、義仲の子を引き渡すよう伝えさせたのである。その言葉を聞いた義仲は苦慮し、家臣団の意向を配慮した結果、嫡子清水冠者を遣わすこととした。義仲は、頼朝との決戦を避けるとともに、叔父行家の身を護るために、子を入質として遣わしたのである。この決断について、行家は義仲への恩義を感じるべきところであろうが、以後、『平家物語』に現れる行家の言動からはそれは認められない。

行家は、自身が頼朝と対立するばかりか、頼朝と義仲との間にも溝をつくり、義仲と清水冠者との間を引き離す結果を招来するのである。^(注2)『平家物語』において、行家は、以仁王の令旨を帯して以降、作品世界の深層に関与することなく、ひたすら表層を滑り続け、その過程で、自らと他者、あるいは、他者間の不協和音を作り出して行く。行家の言動は作品世界の表層をかき乱し続けるのである。

(4) 行家の入京と出京

続いて、行家登場の場面は、平氏軍十万余騎と、義仲軍五万余騎とが戦う北陸道の合戦に移る。寿永二年（一一八三）四月十七日、維盛、通盛等を大将とする平氏方の大軍が、義仲を討つべく出京、北陸道に向かう。平氏軍は、義仲方の前線、越前国火打が城を陥落させると、次々と義仲方の軍を破り、越前から加賀に越え、同国篠原に至るが、ここで軍勢を二手に分け、大手の七万余騎は、加賀と越中の国境、砥浪山に向かい、搦手の三万余騎は、能登と越中の国境、志保山を目指した。これを聞いた義仲は、越後から越中に越え、五万余騎の軍勢を七手に分けて、うち六手の四万余騎は、義仲自身の向かう砥浪山に進むが、残る一手の一万余騎は、行家が率いて志保山に向かった。五月十一日、義仲軍四万余騎が平氏軍七万余騎に対して夜襲を行い、砥浪山の倶利伽羅谷に追い落とし勝利したこと

は、『平家物語』でもよく知られている場面であるが、これに比して、志保の手の、行家軍一万余騎と平氏軍三万余騎との戦いはあまり注目されない。実は、行家はこの戦いで劣勢に立ち、敗北の危機にさらされていた。それを義仲によって救われるのである。

義仲は、砥浪山での合戦に勝利した翌日の五月十二日、「今は思ふ事なし。但十郎藏人殿の志保のいくさこそおぼつかなければ。いざゆいて見む」と、自軍四万余騎の中から二万余騎を選抜し、自身が率いて志保に向かうと、「案のごとく、十郎藏人行家、散々さんざんにかけなされ、ひき退いて、馬の息休る処」であった。そこで、義仲率いる二万余騎が行家軍に替わって平氏の軍勢を攻撃し、勝つことになるのである。行家は、墨俣合戦に続いて、志保でも敗れ、また、頼朝と義仲との対立の場が続いて、ここでも義仲に助けられている。ここに見られる、「案のごとく、十郎藏人行家、散々さんざんにかけなされ、ひき退いて」という叙述の中の、「案のごとく」という表現は、義仲の懸念、不安が的中したことを示す語であるが、行家が将として戦に長じていないことを強く印象付ける一語となっている。なお、延慶本、長門本、源平盛衰記等では、行家が劣勢に立ったところで義仲が現れ、平氏軍を撃退することは等しいが、「案のごとく」というような表現は現れない。

砥浪・志保での合戦に続く、篠原の合戦での行家の行動は記述されていない。したがって、『平家物語』の中の行家は、北陸道の合戦で何らはかばかしい活躍をせぬまま、寿永二年七月二十八日、義仲とともに入京することになる。平氏出京の三日後のことであった。入京に際しては、義仲の率いる軍が近江国を經由したのに対し、行家は、伊賀、大和を通り、宇治橋を経て京に入った（巻第七「主上都落」・巻第八「山門御幸」）。その後、義仲、行家の二人は揃って、

後白河法皇の御所に姿を現す（巻第八「山門御幸」）。その折の義仲のいでたちが、「赤地の錦の直垂アカヂヒラシに、唐綾威の鎧カラヤアサドリヨロイ着て、いか物づくりの太刀をはき、きりふの矢負ひ、しげどうの弓脇にはき」むという姿であったのに対し、行家は、「紺地の錦の直垂コンヂヒラシに、火おどしの鎧ヒヨコ着て、こがねづくりの太刀をはき、大なか黒の矢負ひ、ぬりごめどうの弓脇にはき」むといういでたちであった。覚一本で、行家の正式な軍装が描かれるのはこだけで、義仲と比べても遜色のないそのいでたちの現れるこの場面は、作中、行家の最も晴れがましい場と言えよう。ここで、行家は、政治の中枢、歴史の主軸に生涯で最も接近したのである。なお、この場面、屋代本、百二十句本には、義仲、行家の軍装は描かれておらず、延慶本、長門本、源平盛衰記は、直垂と鎧のみの簡略な描写となっており、行家のいでたちも覚一本に比べて地味である。

翌月の十日、義仲は左馬頭・越後守に、行家は備後守に任ぜられるが、両者とも国を不服としたため、後に（延慶本等は史実どおりに八月十六日の日付を付す）、改めて、義仲を伊予守に、行家を備前守に任命した（巻第八「名虎」）。なお、『玉葉』等によれば、この折、両者ともに従五位下の位を受けている。行家は、これ以降、備前守と呼ばれるべきところである。しかしながら、『平家物語』は、義仲を「木曾左馬頭」と称しながら、行家については「十郎藏人」という従来からの呼称を以後も踏襲するのである。行家を軽く見なす意識の現れであろうか。

入京したとは言え、義仲の死は、翌年の一月に迫っている。作中、その間の義仲は、京の文化になじめず、「無骨」に振る舞い、かたくななる「言葉で話す人物として描き出され（巻第八「猫間」等）、形式に則って悠然と振る舞い、「言語分明ゲンゴフンミン」な頼朝（巻第八「征夷

將軍院宣」と対比されている。確かに、最期を描く場面（巻第九「木曾最期」）では、義仲への賞賛と同情を込めた表現がなされているが、平氏追討も、京の治安維持もままならず、後白河法皇と対立して法住寺合戦をなすに及び、法皇を幽閉した義仲は、批判的に描かれている。意気揚々と入京した義仲ではあったが、それは彼の転落の始まりでもあった。そして、義仲の転落には行家も関与する。

『平家物語』によれば、義仲が派遣した、矢田判官代義清を大將とする軍勢が、寿永二年閏十月一日、備中国水島の海上で平氏軍と船戦に及び敗れる（巻第八「水島合戦」）。それを聞いた義仲は自ら平氏軍と戦うべく西国に赴くが、北陸道の合戦で捕虜となり、義仲に帰順していたはずの妹尾太郎兼康が突然反旗を翻して戦いが始まる（巻第八「瀬尾最期」）。義仲が、激戦の末、兼康を討ち取って、いよいよ平氏に対する戦いを始めようとしたところ、都で義仲の留守を預かっていた樋口次郎兼光からの使者がやって来る。兼光から義仲への知らせは、「十郎藏人殿こそ、殿のましまさぬ間に、院のきり人して、やうく（ガク）に（ガク）讒奏せられ候なれ」というものであった。そこで、義仲は急遽京に戻ることとして摂津国に向かう。一方、行家は、それを知って出京し、義仲との出合いを避けて、丹波路を経て、播磨国に向かい、「木曾と中なをりせん」と思ったのか、室山で平氏軍に立ち向かう（巻第八「室山」）。帰京後、義仲は、壹岐判官朝泰を怒らせ、朝泰が、後白河法皇に、「義仲おこの者で候。只（ただ）今朝敵（いまあしたのあか）になり候なんぞ。急ぎ追討せさせ給へ」と報じたことによつて（巻第八「鼓判官」）、法皇との武力衝突、法住寺合戦が起こる（巻第八「法住寺合戦」）。

『平家物語』に記述されている、この一連の事態の経過の中で、行家は、そもそも恩義を受けたはずの義仲のことを、後白河法皇に

「讒奏」し、後白河法皇と義仲との間に新たな溝をつくり、義仲の平氏攻撃の計画を頓挫させ、自身は義仲との対面もかなわぬ身となつて出京する。彼の言動は、新たな政治的混乱の因子となるとともに、自らの没落をも招く結果をもたらす。恩義ある甥を陥れるために策謀を用いながら、それゆえに自らが苦境に立ち、義仲から逃れるように出京するといふ、行家の捉えどころのない、いわく言いがたいあり方が認められるところである。

ただし、史実は『平家物語』の事態の経過と異なっている。『玉葉』、『百練抄』等によれば、平氏を攻めるべく義仲が出京したのは、寿永二年九月二十日のことで、十月に、妹尾太郎兼康との合戦があり、閏十月一日の水島合戦の後、同月十五日に義仲は帰京している。帰京の理由は、義仲を討つために、頼朝が軍勢を向けたという風説が立つたためである。帰京後、義仲は、後白河法皇を奉じて頼朝を討つための軍を起こそうとするが、行家らが反対し、さらに、行家は、後白河法皇にその計画を報じた。十一月八日に、院宣により、義仲と行家はともに平氏を攻撃すべく西国に向かうはずであったが、行家のみが出京、都にとどまった義仲は、十一月十九日、後白河法皇との武力衝突、法住寺合戦をなすに至り、一方、西国に向かった行家は、同月二十八日、室山で平氏軍と戦うことになるのである。

史実によれば、寿永二年九月以降の事件の展開は『平家物語』と大きく異なり、行家の「讒奏」を聞いて、義仲が平氏に対する攻撃を止めて帰京し、それを知った行家が急遽出京、義仲と和解すべく室山で平氏軍と戦つたといふのは、事件展開をスピーディーに面白くするための『平家物語』の虚構と考えられる。その虚構によって、行家は、捉えどころがなく、いわく言いがたい人物としての印象を付与されてしまっている。

なお、義仲と行家の感情的な対立は、史実の上では、行家が、後白河法皇を奉じ頼朝を討たんとする義仲の計画を、法皇に報じたことと決定的になったと思われるが、『玉葉』寿永二年八月十六日の条には、筆者、九条兼実が伝え聞いたこととして、行家が、入京後の自身の賞が、義仲と比べて厚くないと称して「忿怒」していることが記されている。入京後の早い段階で、義仲と行家との間は気まぐらくなっていたのではないだろうか。それを反映してか、延慶本等では、入京後間もない義仲に、高階泰経が内々に勸賞についての所存を尋ねたところ、義仲は行家について次のように答えたことある。

行家ハ頼朝ニ被追放^(つひはせらむ)テ、義仲ガ許ニ來ル^(きちちといへども)。雖為叔父、已ニ為リ猶子^(いづしより)。義仲ニ対シテ非可被行賞^(おなむくおほはるべきよし)者ニ^(まじ)。行家蒙^(まう)バ、賞、安田三郎義定、同可被行之由令申^(おなむくおほはるべきよし)。

義仲は行家を叔父としてではなく「猶子」と見なし、自身と対等ではないとしている。これが事実であれば、義仲と行家との対立も必然的であったことになる。

経緯はどうであれ、行家は、頼朝に続いて義仲とも反目し合うに至るのである。その後の行家が事態を打開するためには、平氏との戦いに勝たねばならなかったのであるが、その戦いにも、行家は敗北する。

(5) 室山合戦とその後の行家

覚一本によれば、行家は五百余騎（延慶本、長門本は三千余騎、屋代本、百二十句本は二千余騎、源平盛衰記は千余騎とする）を率いて、播磨国室山で、平氏軍二万余騎（屋代本、延慶本、長門本、源平盛衰記は一万余騎とする）に対して戦いを挑む。平氏方は、陣を五つに分けて、わざと行家軍に中を割らせた後、包囲して攻める

戦法を立てた。一陣から四陣までを駆け抜け、行家が第五陣を前にした時、平氏軍は手はずどおり、一気に攻勢に出て、行家軍を破る。行家は平氏方の戦略にはまって敗北を喫するのである。

ただし、敗北が決した後の行家の奮戦は次のように叙述されている（巻第八「室山」）。

十郎藏人、今は遁るべき方もなかりければ、たばかられぬと思ひて、おもてもふらず、命もおしまず、こゝを最後と攻めた、かふ。平家の侍ども、「源氏の大將にくめや」とて、我さきにとすゝめども、さすが十郎藏人にをしならべてくむ武者一騎もなかりけり。新中納言のむねとたのまれたりける紀七左衛門・紀八衛門・紀九郎などいふ兵ども、そこにて皆十郎藏人に討ちとられぬ。かくして十郎藏人、五百余騎が纒に卅騎ばかりに討ちなされ、四方はみな敵なり、御方は無勢なり、いかにしてのがるべしとは覚えねと思ひきつて、雲霞のごとくなる敵のなかをわつて通る。されども我身は手も負はず、家子・郎等廿余騎、大略手負て、播磨国高砂より舟に乗り、をしいだひて、和泉国にぞ付にける。それより河内へうち越えて、長野城にひっこもる。

将としての才量とはかく、武人としてのすぐれた技量、資質を發揮した行家の逃走である。先述のごとく、ここでも、備前守であるはずの行家に、「十郎藏人」という呼称が繰り返されるが、行家の武人としてのなみなみならぬ力量が現れている。単なる敗軍の将に終わっていないところが、彼のいわく言いがたいところである。表現も行家に対して否定的ではない。この場面、屋代本、百二十句本の表現はきわめて簡略で、行家の奮戦は描かれていない。また、延慶本、長門本の記述は、逃走の際、行家が平氏の陣を次々と破り、

一箇所の傷も負わずに逃げおおせたことは示しているものの、行家の強さはあまり現れておらず、覚一本では、行家が、紀七左衛門・紀八衛門・紀九郎を討ちとったとしているが、この二本においては、紀七・紀八・紀九郎の兄弟の弓矢が行家軍の進撃を止めたことになっている。源平盛衰記では、行家とともに戦った武士についての記述に詳しいが、行家個人の力量を浮き彫りにする表現はあまりない。室山合戦については、覚一本が最も行家の武の技量を際立たせている。源平両軍の兵力の格差も、覚一本が最も大きく、寡兵の行家軍が平氏の大軍を相手によく奮闘したという印象を最も強く与える。

さて、行家と対立するに至った義仲は、頼朝の派遣した、範頼、義経率いる大軍に敗れ、寿永三年一月二十一日（延慶本等は史実どおりに、一月二十日とする）、今井四郎兼平とともに粟津で戦死する。この頃、行家は、河内国長野城を、義仲の差し向けた樋口次郎兼光の軍に攻め落とされ、逃走しているところであった。兼光は、行家が紀伊国名草にいると聞いて、さらなる追撃を準備していたところで、都で戦があると聞いて引き返すのである。このように、行家は危地を脱する。一方、兼光は、京に向かう途中で、主である義仲、弟の兼平の死を知り、京に攻め入るが、戦いの中で降人となり、後に斬首される。義仲と兼光は、行家の存在ゆえに、共に戦うことができなかった。義仲にとって、頼朝の許から出奔した行家を受け入れたことがさまざまな躓きのもととなったのである。

紀伊国名草に逃れて以降の行家の足どりは定かではなく、一の谷の合戦（寿永三年〱一一八四〱二月）、屋島の合戦（元暦二年〱一一八五〱二月）、壇の浦の合戦（元暦二年三月）のいずれにも参戦した形跡はない。反目し合った頼朝の軍には加わりようがなかったか。しかし、このように、作品世界から退場したに等しかった行家

が、突然、巻第十二「判官都落」の段で再登場するのである。頼朝との不和が決定的となり、文治元年（一一八五）十一月、都を離れ、西国を目指すことになった義経の一行の中に、行家の名が現れるのである。西国で再起を図り、頼朝と戦おうとする義経に同行するところに、行家の消えやらぬ野心が感じられる。ただ、その野望もあえなく潰える。大物の浦から出航した義経、行家の一行は、暴風によって散り散りになり、以後、行家は、義経とはもはや会えぬまま、頼朝の探索を逃れて潜伏する。

なお、覚一本等は、義経の一行の中に、信太三郎先生義憲（義教・義広）が加わっていたとしているが、これは史実と異なる。源為義の三男で、行家の兄である義憲は、常陸国信太を本拠地とし、一旦は、頼朝に味方するが、やがて頼朝に敵対して挙兵し、敗れると義仲の陣営に身を投ずる。その後は、義仲と行動を共にして、義仲の死後は頼朝の探索の手を逃れて潜伏していたが、『吾妻鏡』によれば、元暦元年（一一八四）五月四日に、伊勢国羽取山で、戦いの末に討ち取られている。これが事実であろうか。ただし、延慶本と源平盛衰記は、元暦元年六月三日に、義憲が双林寺で捕えられたと記している。覚一本等は、義憲が、行家とともに義経に同行し海上で遭難後、潜伏していたが、行家が討たれるのと、時ほ同じくしておのおの別なところで討たれたと叙述しており、義憲を行家と関係付けて捉えていることになる。^{注30}ただし、両者は相補的關係とは言えない。最期の場面でも、義憲と行家の兄弟が、互いに相手を意識するような表現はないのである。

(6) 作品世界の表層を滑る行家

「十郎藏人」と呼ばれるようになった治承四年（一一八〇）の夏

以来、行家は、以仁王の令旨を携えて、東国各地の源氏の間を巡り、以仁王、頼政の没後は、頼朝に属し、大将として墨俣まで進出するが、ここで平氏軍に敗北し、三河まで追撃された。その後、頼朝の許を出奔し、義仲の陣営に身を投じ、彼自身ははかばかしい戦果のないまま、義仲とともに北陸道を進んで入京、備前守に叙任されるが、「十郎藏人」の呼称のまま、義仲と敵対して出京、播磨国室山で平氏軍に敗れて河内国長野城に逃れる。しかし、そこも義仲の部将、樋口次郎兼光に攻め落とされ、紀伊国名草に逃れ、義仲没後、しばらくは登場しないが、頼朝との不和が決定的になった義経に加担する。元暦二年（一一八五）十一月に、義経とともに西国を目指して、大物の浦で乗船するが海上で遭難し、以後、義経とも離れて潜伏する。

このように、行家は、源平の争乱の世を生き抜いてきた。五年半に及ぶ、行動の軌跡において、行家は実に多くの地に足跡をとどめている。が、その間、頼朝、義仲、義経と時代を動かした甥たちの間を巡りながら、彼自身は、将として戦いにも勝つこともなく連戦連敗、新たに何かを創出することもないまま、作品世界の表層を滑り続けた。行家がつくり出したものといえは、自身と他者との間の対立と、他者間の溝であり、野望の果てに、最終的に手にしたものは何もなく、最後まで自身に寄り添うしかるべき人物もいなかった。しかし、『平家物語』は、こうした行家をことさらに批判することなく、時には、武人としての力量を際立たせる描写をなした。『平家物語』において、行家は本質的に独自でひとりなのである。

諸本間の表現の異同、疎密を超えて、『平家物語』における行家は、基本的にこのような存在性を示している。そして、巻第十二の「泊瀬六代」の段に至って、行家の最期が記される。

三 行家の最期

巻第十二「泊瀬六代」における最期のあり方の詳述によって、『平家物語』の中の行家の存在感は従前の域をはるかに超えて重くなる。それだけ、この場面は、『平家物語』の行家の存在性を捉える上で重要である。事の始まりから詳しく叙述を見ることにする。

元暦二年（一一八五）の十二月、北条時政が、清盛の曾孫で、平氏嫡流の六代御前を捕え、東国に向かって護送している時のこと、近江国で頼朝の遣わした使者に会う。使者は、時政に対して、行家と義憲を討てという旨の頼朝の意向を伝えるが、帰京のかわね時政は、甥の北条平六時貞に命じ、探索の任に当たらせる。

帰京した平六（『平家物語』は「時貞」とは称さず「平六」と呼び続ける。行家を「十郎藏人」と呼ぶのと対応するかのよう）は、行家の在所を知るといふ園城寺（三井寺）の僧の存在を知る。その僧に尋ねると、「我はくはしうは知らず。知りたりといふ僧こそあれ」と答える。そこで、その問題の別の僧に尋ねることになるのだが、このあたりの盪回し的な展開はすでに喜劇的である。

平六は、問題の僧を搦め取る。その後の展開は次のように叙述されている。

「是はなんのゆへにからむるぞ」。「十郎藏人殿の在所知ったんなればからむる也」。「さらばをしへよとこそ言はめ。さうなうからむる事はいかに。天王寺にとこそ聞け」。「さらばじんじよせよ」とて、平六が智の笠原の十郎国久・殖原の九郎・桑原の次郎・服部の平六をさきとして、其勢卅余騎、天王寺へ発向す。十郎藏人の宿は二所あり。谷の学頭伶人兼春、秦六・秦七と

云者のもとなり。ふた手につくつて押よせたり

この叙述の前半には、二人の発話がそのままぶつかり合う形の掛け合い的表現^(注32)が現れるが、これは、行家が捕えられて護送されるまでの叙述において特徴的に現れる表現で、スピードと滑稽さを感じられる。「さらばじんじよせよ」以降の表現も速い。人名の列記、「発向す」という動詞終止形の登場、三つの短文の畳み掛けと続き、息をつかせない。その中に、今後展開される、「二」という数をめぐる言語遊戯が潜んでいる。行家の宿が「二所」であったので、「ふた手」に分かれて押し寄せる。「十郎藏人」、「北条平六」はもとより、寄せ手の武士の名も、「十郎」、「九郎」、「次郎」、「平六」、行家の在所の主の名も「秦六」、「秦七」とあるのも数をめぐる言語遊戯が意識されているのか。

さて、行家は、兼春の許にいたのだが、武装した者が家に入るのを見て裏から逃れる。行家は相変わらず逃亡に長けている。兼春には娘が「二人」いて(覚一本では、この設定についても「二」という数をめぐる表現上の戯れが意識されているよう)、「ともに藏人の思ひもの」であったため、捕えて行家のゆくえを尋ねるが、「姉は、『妹にとへ』と言ふ。妹は、『姉にとへ』と言ふ」ということになる。この表現内容も盪回し的である。延慶本では、兩人がともに「我モ不知」と答えたときれているが、これは、盪回しではない。屋代本、百二十句本、長門本には、このような場面はない。覚一本が諸本中で最も行家が捕えられるまでの経緯を詳述しており、盪回し的展開、掛け合い的表現、数をめぐる遊戯に対して最も熱心である。そして、この場面、「我モ不知」と答えるのではなく、「妹にとへ」、「姉にとへ」と答えていることから、行家が姉妹のいずれとも心が通じ合っていないことが露呈される。姉は、自分よりも

妹の方が行家と深くかかわっていたと思い、妹は、自分よりも姉の方が行家と深くかかわっていたかと思っているのである。姉妹がどちらもそのような感ずるように、行家はどちらとも深い心の結び付きがなかったのである。これでは、到底、男と女の「ものがたり」にはならない。そもそも『平家物語』、特に覚一本は、夫と妻、男と女という、相補的関係にある二人の「ものがたり」に長けているはずなのであるが、行家の場合はまったくそれを語ろうという素振りも見せない。行家のいい加減さ、無軌道さのみが印象に残る。

ところで、逃れた行家は、熊野に向かおうとするが、ただひとり彼に付いていた侍が足を病んだため、和泉国八木郷に留まる。行家が主従「二人」でいたことも、数をめぐる遊戯とのかかわりで注目されるが、逃亡中でありながら行家が郎等を見捨てないことも注目される。ところが、留まった家の主が行家を見知っていて、主は急いで京に行き、北条平六に報告する。天王寺へ差し向けた兵がいまだ帰らぬ折のこと、平六は、誰を遣わすべきか思案して、郎等の大源次宗春を呼ぶ。その後の展開は、次のように叙述されている。

「汝が宮たてたりし山僧はいまだあるか」「さん候」。「さらば呼べ」とて呼ばれければ、件法師出できたり。「十郎藏人のおはします、討って鎌倉殿にまいらせて、御恩蒙りたまへ」。「さうけ候ぬ。人をたび候へ」と申。「やがて大源次くだれ、人もなきに」とて、舍人・雑色、人数わづかに十四五人相そへてつかはす。常陸房正明といふものなり

これも速い表現である。二度、掛け合い的表現が現れるほか、「さらば呼べ」とて呼ばれければ、件法師出できたり」には、特に速さを感じられる。法師の名が、常陸房正明であることも遅れ気味に紹介されるほどである。また、話を元に戻せば、行家を討てとい

う頼朝の命を受けたのは北条時政であったが、時政は甥の平六にそれを命じ、平六は一旦鐸の笠原の十郎らを天王寺に遣わし、その帰りが間に合わぬとなると、大源次宗春に命じて常陸房正明を連れて来させ、この常陸房に行家を討つよう命ずることになったのである。先の僧の一件とも合わせて、まことにもって回った、盪回しの展開と言えよう。

北条平六の命を受けた常陸房は、行家がいると報ぜられた家に行くが、そこには居らず、通りがかりの人を捕えて、「言はずはきつて捨ん」と脅し、「よに尋常なる旅人の二人」が移った家聞き出すとそこに向かう。その後の展開は次のように叙述されている。

常陸房黒革威の腹巻の袖つけたるに、大だちはいて、彼家に走入ッて見れば、歳五十ばかりなる男の、かちの直垂におり烏帽子着て、唐瓶子、菓子などとりさばくり、銚子どももって酒すゝめむとする処に、物具したる法師のうち入を見て、かいついてにげければ、やがてつゞいて追っかけたり。藏人、「あの僧。や、それはあらぬぞ。行家はこゝにあり」との給へば、走帰ッて見るに、白い小袖に大口ばかり着て、左の手には金作りの小太刀をもち、右の手には野太刀のおほきなるをもたれたり。常陸房、「太刀なげさせ給へ」と申せば、藏人大にわらはれけり

『平家物語』で飲食の場が現れる叙述は珍しい。また、注目すべきは、行家にただひとり付いていた郎等が、主を庇おうともせず、一目散に逃げしてしまうことである。この郎等が足を病んだがために行家は先を急がずに留まったのではなかったか。その郎等が逃げってしまうのである。行家はここで完全にひとりになる。しかし、行家は、郎等を行家と見誤って追いかけようとする常陸房を呼び止めて

いる。そうしたければ、行家は常陸房が郎等を追っている隙に逃げおせたのかも知れない。行家は単なる逃げ上手ではない。常陸房を呼び止めたのは、郎等を庇おうとしたからでもあり、また、行家の武人としての自恃の現れでもあろう。『吾妻鏡』によれば、文治二年（一一八六）五月十一日、行家が捕縛される際、郎等一兩人が防ぎ戦ったことを記しているが、『平家物語』は、これまでしばしば取り入れた、主従という相補的關係の二人の「ものがたり」を、行家については適用しない。あくまでも行家を独自のひとりとして描こうとするかのようなのである。そのためか、逃げだした郎等に対する批判的言辞を差し挟まず、すぐさま行家のいでたちと行動の表現に移る。常陸房に対して、行家は、「二刀」を持って立ち向かい、そこから行家と常陸房との「二人」だけの戦いが始まる。これらの設定にも「二」という数をめぐる表現上の遊戯が意識されているのではないか。常陸房は、戦う前に、「太刀なげさせ給へ」と言う。その言葉に、行家は「大にわら」う。

この笑いには、行家の捉えどころがなく、いわく言いがたい存在性が象徴的に現れているように思われる。^(注33)なぜ笑うのか、この笑いにとどのような意味があるのか測りがたい。行家にとっては、笑いたかったから笑ったのであり、いかなる理由も意味も意識していないことなるうが、それだけにこの笑いには、無意識のうちに、無数の理由と無限の意味が込められているように感じられる。いわく言いがたい笑いであり、この笑いの理由と意味を探ることは、不可解な沈黙の理由と意味を探るに等しい。無限の饒舌を潜めた沈黙に等しい笑いである。「藏人大にわらはれけり」という、竟一本の一言は無限の意味を充填し得る空所なのである。延慶本では、この行家の笑いは、「行家 大ニアザワラウ声、家ノ内ヒギキワタル。」

童部ノ瓶ノ中ニ頭ヲ指入テ咲ニ似タリ」と表現されている。不敵で豪快であるとともに、どこか不気味な笑いである。この表現に「昌明少モハハカラス寄合タリ」と続くように、多分に威嚇的な笑いでもある。「童部ノ瓶ノ中ニ頭ヲ指入テ咲ニ似タリ」という譬えとも合わせて、延慶本における行家の笑いも測りがたい笑いではあるが、覚一本の笑いほど取りつく島がないわけではなさそうである。なお、この場面、屋代本、百二十句本、長門本等には、行家の笑いは現れない。覚一本には、この「蔵人大にわらはれけり」に続いて、次のような表現が現れる。

常陸房 走よってむずとさる。ちやうどあはせておどりのく。又よつてさる。ちやうどあはせておどりのく。よりあひよりのき、一時ばかりぞたゝかふたる。蔵人うしろなるぬりごめの内へ、しざり入らんとし給へば、常陸房、「まさなう候。な入らせ給ひ候そ」と申せば、「行家もさこそ思へ」とて、又おどりに出たゝかふ。常陸房太刀を捨て、むずとくんでどうど臥す。うへになり下になりころびあふ処に、大源次つツと出できたり。あまりにあはせて、はいたる太刀をば抜かず、石をにぎつて蔵人のひたいをはたとうつて打わる。蔵人大にわらつて、「をのれは下臈なれば。太刀・長刀でこそ敵をばうて、つぶてにて敵うつ様やある」。常陸房、「足をゆへ」とぞ下知しける。常陸房は、敵が足をゆへとこそ申けるに、余にあはせて四の足をぞゆうたりける。其後蔵人の頸に縄をかけて、からめひきおこしておしすへたり

「よつてさる」常陸房と、「ちやうどあはせておどりのく」行家との戦いの表現は、多分に掛け合ひ的である。速さ、運動性が感じられる表現である。その後の、「よりあひよりのき、一時ばかりぞ

たゝかふたる」も、表現は速いものの、内容としては、そのまま一時ばかり、約二時間、二人が戦い続けたことをもの語っている。内容にリアリティーがあるのではなく、表現の持つ速度感それ自体が臨場感となっている。そもそも接近して太刀を振るう常陸房に対して、行家は太刀を合わせて跳び退くのであり、ひとつの家の中で、約二時間、行家はどこまで後ずさりできるといふのか。「よりあひよりのき、一時ばかりぞたゝかふたる」という表現は、二人の激闘を印象付けるとともに、どこか滑稽さを忍ばせる。なお、「一時ばかり」も戦つたという記述は、屋代本、百二十句本、延慶本、長門本等には認められない。また、覚一本の記述には、行家が二刀を持つことの意味が現れていないが、延慶本、長門本では、行家が二刀を振るうて常陸房を苦戦させる様子が描かれている。覚一本は、様態よりも運動性それ自体を表現しようとしているようである。

塗籠の中に退こうとする行家に向かつて、常陸房が「まさなう候。な入らせ給ひ候そ」と言つたところ、行家は「行家もさこそ思へ」と述べ、ふたたび躍り出て戦う。敵の見苦しいという意味の一言に、すかさず「自分もそう思う」という一言で答え、進み出て戦う行家の言動には、武人としての自持が認められる。郎等を行家と見誤り追おうとする常陸房を呼び止めた、先の言動とも重なる。

行家と常陸房が戦う中で、大源次のあわてようは滑稽である。石で行家の額を打ち、縄で行家の足ばかりか、常陸房の足までも一緒に縛ってしまう。この「二人」の足を同時に縛り、二×二、「四」の足を結うところで、これまで展開されてきた数をめぐる戯れは完結する。また、ここでも、行家は、大源次に額を石で打たれた時に「大にわらつて」いる。大源次の道理を逸脱した行為を笑っていることは分かるのであるが、まさに捕われの身となろうという切迫し

た状況下で、なぜ、どのような心情から笑うのか、いわく言いがたく、その点は先の笑いの場合と同様である。この場面、屋代本、百二十句本、延慶本、長門本等には、行家の笑いは現れず、そのうち延慶本、長門本には、石で額を割られた行家の流血のことが現れている。この二本は、凄惨さを伴ったリアルな表現をなしているのであるが、覚一本は、それとは別に行家の身体への言及をすることなく、彼の豪放さ、豪快さを強く印象付けている。身体への関心が強く現れている延慶本、長門本に対して、覚一本は身体性から切り離された運動性と精神性を表そうとしているのである。

捕われの身となった後の行家の言動は、次のような叙述において現れる。

「水まいらせよ」とのたまへば、ほしきをあらふてまいらせたり。水をば召して、糲をば召さず。さしをき給へば、常陸房とツてくうてンげり。「わ僧は山法師か」。「山法師で候」。「誰と言ふぞ」。「西塔の北谷法師、常陸房正明と申者で候」。「さては行家につかはれんと言ひし僧か」。「さ」候。「頼朝が使か、平六が使か」。「鎌倉殿の御使候。誠に鎌倉殿をば討まいらせんとおぼしめし候しか」。「是程の身になつて後、思はざりしと言ひばいかに。思ひしと言ひばいかに。手なみの程はいかゞ思ひつる」との給へば、「山上にておほくの事にあふて候に、いまだ是ほど手ごはき事にあひ候はず。よき敵三人に逢たる心地こそし候つれ」と申。「さて正明をばいかゞ思めされ候つる」と申せば、「それはとられなんうへは」とぞのたまひける。「その太刀とりよせよ」とて見給へば、藏人の太刀は一所もきれず、常陸房が太刀は四十二所きれたりけり

この叙述の始めの、行家が糲をひたす水だけを飲み、常陸房がそ

の後の糲を食うという記述は、先の唐瓶子、菓子、酒が現れる叙述同様、飲食のことがあまり叙述されない『平家物語』にあつては珍しい表現である。行家の水だけを飲むという行動には落ち着いた慎みを感じられる反面、常陸房の糲を食う行為には滑稽さが漂う。

「とツてくうてンげり」という表現のあり方がそれを助長する。豪快な一方、このように不作法な常陸房が、行家にとっての最後の戦いの相手なのである。しかし、行家にはそれを嘆く素振りもなく、また、作品も常陸房の不作法さについて特に批判的な言辞を加えない。行家の貴種性は『平家物語』には、あまり現れていないのではないだろうか。確かに、武人としての自持は認められるものの、彼をめぐる叙述には、飲食にかかわること、滑稽さの現れている表現、遊戯的な表現などが少なくない。行家は「従五位下備前守」、「備前前司」としてではなく、「十郎藏人」として作中に登場している。十郎藏人と常陸房とでは、確かに、十郎藏人を格上にして描いているが、活動域、住む世界を等しくする者同士のように思われる。作中、常陸房ほど、行家と親しみ合う人物はいないのではないだろうか。戦いの後の対話がそれをもの語る。

行家と常陸房の対話は実にスピーディーに展開する。特に、「わ僧は山法師か」という行家の発話に始まる掛け合い的表現は、九つの発話を連ねており、この形の表現が少なくなかった、これまでの叙述の中でも特に目をひくばかりか、『平家物語』全体の中でも最も多くの発話を連ねる表現となっている。行家の死はすでに間近に迫っているのであるが、この掛け合い的表現を中心とした、行家と常陸房との対話は軽快さをもって展開している。ただし、行家の発問には常陸房がすべて答える一方で、常陸房が発する二つの問いに対しては、行家はまったく答えないということには深い意味を探る

べきであろう。常陸房の「本当に頼朝を討とうと思ったのか」という問いには、「捕われの身となった今となっては、そう思ったと言っただけである。そう思わなかったと言っただけである」とまっただけ答えておくとせず、「手なみの程はいかゞ思ひつる」と、自らの関心事はこれのみと言わんばかりに逆に問い掛ける。常陸房は、行家がこれまでに出たうち最大の難敵であることを強調し、続いて、行家に対し、自分の手並みはどう思ったのかと問うのだが、これにも、「こうして捕えられた上は」とだけ述べ、答えようとせず、その替わりに太刀を持って来させる。すると、行家の太刀には一か所の刃こぼれもなく、常陸房の太刀には四十二か所の刃こぼれがあったということになる。ただし、これは、現実味のない記述であり、延慶本等の記述のごとく、両者の刀にはともに四十二か所の刃こぼれがあったとするのが自然と言えよう。延慶本等がここで二人の戦いのすさまじさをもの語ろうとしているのに対し、覚一本は、行家の答えの沈黙を補って余りある答えを示している。しかし、沈黙はあくまでも沈黙であり、常陸房の力量についての感想を述べなかつた、行家の思いの微妙な点、奥深いところまでは解し兼ねる。頼朝への敵意についての沈黙は、いっそう不可解であり、義経に加担してまでも敵対した頼朝をどう思っていたのか、どれほど恨んでいたのかは、ついに明かされない。確かに、常陸房の問いに答えるのは、慎みを欠いた、軽々しい行為であり、どう答えても未練を示すことになつてしまふわけで、それを避けての沈黙であることは間違いないが、沈黙それ自体が、先に触れた笑いと同じく、無限の意味を充填し得る空所として存在してしまっている。行家が語らぬ限り、その沈黙は謎であり、無限に他からの言葉を喚起し続けることになる。そし

て、行家は、それ以上、何も語らぬまま、赤井河原に護送され、そこで斬首される。

やがて伝馬たてさせ乗せ奉てのぼる程に、其夜は江口の長者がもとにとゞまつて、夜もすがら使をはしらかす。明る日の午翹ばかり、北条平六、其勢百騎ばかり、旗さゝせて下る程に、淀の赤井河原でゆき逢たり。「都へは入れ奉るべからずといふ院宣で候。鎌倉殿の御気色も其儀でこそ候へ。はやく御頸を給はつて、鎌倉殿の見参に入れて、御恩を蒙給へ」と言へば、「さらば」とて赤井河原で、十郎藏人の頸をきる

行家は、ここで中心になる当事者でありながら、表現上、局外に立ってしまっている。『吾妻鏡』は、行家の斬られた日を、文治二年（一一八六）五月十二日としている。四十五歳前後であったと思われる。さらに、『吾妻鏡』は、その翌日の五月十三日、行家の子、大夫尉光家が処刑されたことも記している。『吾妻鏡』は、行家の子、光家がどのような経緯で死を迎えたのか語っていない。まして、『平家物語』は、いずれの諸本も、光家の人となりや行動どころか、存在さえも語っていない。したがって、父と子という相補的關係の二人の「ものがたり」を描くことに長けている『平家物語』においても、行家にその「ものがたり」は適用されていないのである。日一日を違えて殺されたことされる子も持ちながら、行家はその子を意識することなく斬られたことになっている。史実の上で、行家は子を持つ父親であつたに相違ない。しかしながら、『平家物語』では、延慶本等で、先述の、行家が頼朝に宛てた文の中に、墨俣合戦で息が戦死したということが記されているだけであり、そこでは子の名も明かされていない。『平家物語』の行家は父と子の「ものがたり」を形作ることもなく、表現上、父としての存在性を示すことも

ない。彼が、男と女、夫と妻の「ものがたり」、主従の「ものがたり」を形作っていないことも合わせて考えると、『平家物語』の行家は、独自のひとりであったことになるのである。

なお、覚一本では、先述のとおり、行家の最期が語られた後、義憲の最期が記述される。義憲の最期の叙述は、行家の最期の記述とは比べようのないほど簡潔である。その後、行家を捕えた常陸房は、義憲を討つに及んだ服部平六とともに、おのおの行家、義憲の首を持って鎌倉に赴く。が、兩人は、そこで「神妙なり」と賞されながら、常陸房は、勲賞を蒙るどころか流罪に処される。常陸房が嘆いたことは言うまでもない。しかし、彼は二年たったところで召し返され、「大將軍討つたるものは冥加みやがのなければ、一旦いましてつるぞ」と流罪の説明があつた上で、但馬国の多田庄、摂津国の葉室を所領として得たという。服部平六にはこのような措置がなされなかつた一方で、常陸房は実に不可解な待遇を受けたものである。「大將軍討つたるものは冥加のなければ、一旦いましてつるぞ」という流罪の理由も、実際、説明にはなっていないように思われる。常陸房の一旦の流罪はやはり得体の知れぬ措置である。行家の周辺には、最後まで、得体の知れぬことが付きまといつていたのである。

四 『平家物語』における行家

『平家物語』において行家は、作品世界の表層を滑り続ける。作品の叙事の展開を主導的に推進する機能を果たすことはない。自力で新たな状況を切り拓くことはないのである。むしろ新たな状況を切り拓こうとする人物、以仁王、頼政、頼朝、義仲、義経に抜擢され、援助を受けながらも、それに応え、報いることもなく、時には、

逆に讎をなす。他者と結び合うよりも、反目し合い、他者間に溝をつくる。表面に出て力を振るうのではなく、他者の裏側に回り、自身の野望を実現しようとする。が、他者を疎外しようとする図りながら自身がまず疎外されてしまう。そのような言動の目的自体が定かではない。一体、何のためにそうしなければならぬのか。そのように戸惑わせるところが、彼の捉えどころがなく、いわく言いがたいところである。しかも、『平家物語』は、行家の言動を記述するのみで、特に批判的言辭を差し挟まない。それが、いっそう行家の存在を得体の知れないものにしていく。

一方、行家は平凡な武人でもなければ、保身のみで行動する人物でもない。墨俣合戦でも、志保の戦いでも、彼は身をまっとうし、何よりも、室山合戦、常陸房正明との戦いでは、武人としての非凡な力量を発揮し、敵に恐れさえ抱かせている。また、室山では、命を惜しまず戦い、常陸房正明との戦いの際は、逃げようともせず、むしろ、郎等を庇う形で戦いを挑んでいる。足を病んだ郎等のために、逃走を続けなかつたことも想起される。行家は、自恃の精神が強く、力量にも恵まれた武人であり、必ずしも非人情な人物ではない。そのことが、さらに、行家を捉えどころなくしている。単に、周囲をかき乱すだけの人物ではないのである。

また、行家をめぐる動静は、最期の場面でも、抒情化されていない。「十郎藏人」以外の何者でもなく、夫でも、父でも、主でもない。史実の彼は、夫であり、父であり、主であつたのだが、『平家物語』の行家には、夫として、父として、主としての属性が付与されていないのである。妻からの、子からの、郎等からのまなざしは設定されていない。登場人物に類型としての存在の重さを付与する『平家物語』の「ものがたり」的手法は適用されていない。しかも、

貴種としての属性も与えられていない。行家は、「從五位下備前守」「備前司」としてではなく、登場時のまま、「十郎藏人」と呼ばれる。最期の場面でも、飲食にかかわることの記述、滑稽な行動の記述、数、特に「二」という数をめぐる遊戯的表現、掛け合の表現、盪回したぐりまわし的表現等、スピード感、軽快感、滑稽感を印象付ける言葉の綾が連ねられている。哀感の表出は抑制され、行家の存在性と相即するように、表現は運動性を伴って表層を滑る。また、行家は、阿弥陀如来の衆生済度の本願に光明を見出そうとはしない。行家に、無常觀の枠組みが当てはめられることもない。もちろん、行家の言動が明確な倫理觀を提起することもない。彼は理とはほとんど無縁である。確かに、彼の死は、現象としては無常である。しかし、表現上、行家の言葉や行動のうちには、無常の認識はうかがえない。行家の最期が因果応報の理で捉えられてもいない。人知人力をこえて人間を支配する運命も、彼が意識しているようには思えない。『平家物語』に設けられているあらゆる枠組み、型、「ものがたり」が行家の形象の前には意味をなしていないのである。それが、行家の捉えどころのなきの根本的な要因である。

ところが、一方で、行家の最期が、軽快で滑稽な表現のみで押し通されているかといえそうではない。先に注目した、覚一本における、二度の笑いと二度の沈黙が、そのことを最も端的にも語る。この無限の意味を充填し得る空所が、行家の言葉にならぬ何かを際限なく語り続け、行家の存在に無限の意味と重みを付け加えているように思われる。この空所こそが、行家の捉えどころのなき、いわく言いがたいところの根幹をなす。覚一本が最も尖鋭に行家の存在性を捉えていることになる。もちろん、延慶本、長門本等が、墨俣合戦や、頼朝の許を出奔する折の行家の動静を詳述している点は見

逃し難いのであるが。覚一本を読み、巻十二「泊瀬六代」に至って、行家の二度の笑い、二度の沈黙にこだわってしまうと、以前に現れた行家についての記述が気にかかり、それを再度確認したくなる。しかし、それらを再確認しても、笑いと沈黙の意味のすべてが説き明かされることはない。作中の行家のみが知り、何も語らぬまま、行家は作品世界から退場してしまっているのである。覚一本『平家物語』の行家が設けた空所は、永久に埋められることのないまま、永久運動としての読みを喚起し続ける。作品の深層に触れることなく、表層のみを滑り続けたはずの行家が思わぬ深淵を用意していたのである。

『平家物語』の行家は、多分に一貫性、統一性をもって、捉えどころがなく、いわく言いがたい人物として形象されていると言つてよい。作中の行家は、捉えどころがなく、いわく言いがたいことを本質とする独自でひとりの人物なのである。

これまで、行家の捉えどころのなきを捉え、いわく言いがたいところを言葉にするために考察を続けてきたのであるが、なぜ、捉えどころがなく、いわく言いがたいのかを明らかにしつつも、問題は出発点に戻ったことになる。そして、ここに至っては、『平家物語』、特に覚一本が、歴史的な人物や事象に対して、それらを意味化する、多くの理、枠組み、型、「ものがたり」等を持ち合わせながら、行家の形象にそれを適用していないというこの意味（あるいは、意義）に注目すべきではないだろうか。『平家物語』の表層、表現の運動それ自体に目を向けるべきことを行家の形象は示唆しているように思われる。

それを認めた上で問い直してみる。『平家物語』において、行家は、本当に独自でひとりなのかと。確かに、それはそのとおりであ

る。しかし、行家の他にも、独自でひとりの人物がいらないのかと考
えると、行家の最後の戦いの相手が常陸房正明であったことは示唆
的である。常陸房も独自でひとりの人物であった。さらに、常陸房
は「悪僧」と呼ばれるような人物である。『平家物語』に登場する
悪僧は少なくない。『平家物語』の行家的世界は、悪僧的世界と交
流、ないしは隣接しているのではないか。『平家物語』において、
結果的に、以仁王の令旨を伝えた行家の歴史的役割を奪うことにな
った文覚も多分に独自なひとりでである。そして、何よりも、行家の
形象、存在性を浮かび上がらせる表現に見られた特質は、作中各所
の表現にも認められる。人物形象の問題は、叙述の形質の問題とも
深くかかわる。行家の形象を起点にして考察を進めることによって、
『平家物語』の作品世界の一面の大きな広がりが見えてくるのでは
ないだろうか。その広がりには、『平家物語』だけにとどまらぬよう
にも思われる。

注

- 1 この問題に関しては、拙稿、「『平家物語』の年代記性の考察―巻第
六最終部の叙述の検討を中心に―」（『文芸研究』第一一八集 昭和六
十三年五月）、「『平家物語』―〈作品〉と〈史料〉との間―」（あなた
がよむ平家物語³ 平家物語と歴史）／有精堂出版 平成五年九月／所
収）等において考察を行っている。
- 2 『平家物語』の中で重盛が果たす役割とその意義については、拙稿、
「『平家物語』における平重盛像の考察―物語における機能と文芸的意
義をめぐって―」（『日本文芸論稿』第十五号 昭和六十一年十一月）、
「覚一本『平家物語』における平氏一門の運命の表現―平重盛、平知盛、
建礼門院の存在様態と機能に着目して―」（『日本文芸論叢』第七号
平成元年十月）、「『平家物語』における権威と文芸性―作品世界に響く

発話の権能に着目して―」（『菊田茂男教授退官記念 日本文芸の潮流』
〈おうふう 平成六年九月／所収〉において考察を行っている。

3 この問題も含め、『平家物語』の中の宗盛の存在のあり方については、
拙稿「『平家物語』における平宗盛―その存在の特異性をめぐって―」（
『信州大学教養部紀要』第二十七号 平成五年三月）において、考察
を行っている。

4 このことは、注3の拙稿において論及している。

5 このことについては、拙稿「『平家物語』の〈記録〉／〈解釈〉と〈描
写〉―『栄花物語』との比較を通して―」（『文芸研究』第一二四集
平成二年五月）において論及を行っている。

6 覚一本で言えば、巻第九「木曾最期」の段参照。

7 覚一本で言えば、巻第九「二度之懸」の段参照。

8 覚一本で言えば、巻第九「敦盛最期」の段参照。読み本系の広本で
は、この場面の他に、延慶本で言えば、第五本「兵衛佐ノ軍兵等付宇
治勢田事」における、熊谷直実についての記述もかわる。

9 覚一本で言えば、巻第十一「内侍所都入」の段参照。

10 『平家物語』の行家についての論及としては、水原一氏校注、新潮
日本古典集成『平家物語下』（新潮社 昭和五十六年十二月）三五―頁
頭注欄の、水原氏による、「義教・行家」の解説、松尾葦江氏「『平家
物語』―十郎藏人行家の笑い」（『高校通信 東書国語』二六八号 昭
和六十一年十二月）、吉田晴洋氏「平家物語研究―十郎藏人行家像―」（
『緑岡詞林』第十九号 平成七年三月）が挙げられる。

11 覚一本のテキストとしては、覚一本系の一本、高野本を底本にして
校訂を施した、梶原正昭氏・山下宏明氏校注、新日本古典文学大系
『平家物語上・下』（岩波書店 平成三年六月・平成五年十月）を使用
する。

覚一本以外の『平家物語』諸本について、用いたテキストは次のと
おりである。
屋代本―佐藤謙三氏・春田宣氏編『屋代本平家物語 上巻・中巻・下

- 卷』(桜楓社 昭和四十二年六月・昭和四十五年五月・昭和四十八年五月)
- 百二十句本―水原一氏校注、新潮日本古典集成『平家物語上・中・下』(新潮社 昭和五十四年四月・昭和五十五年四月・昭和五十六年十二月)
- 延慶本―北原保雄氏・小川栄一氏編『延慶本平家物語 本文篇 上・下』(勉誠社 平成二年六月)
- 長門本―国書刊行会編『平家物語 長門本』(名著刊行会 昭和四十九年八月)
- 源平盛衰記―渥美かをる氏解題、古典研究会叢書『源平盛衰記一・二・三・四・五』(古典研究会 昭和四十八年五月・七月・十月・昭和四十九年一月・四月)
- 四部合戦状本―松本隆信氏改題・校訂、斯道文庫古典叢刊『四部合戦状本 平家物語 上・下』(汲古書院 昭和四十二年三月)
- なお、次の書も適宜参照した。
- 麻原美子氏・春田宣氏・松尾葦江氏編『屋代本高野本対照平家物語一・二・三』(新典社 平成二年五月・平成三年九月・平成五年六月)
- 森岡常夫氏編『岡山大学本平家物語二十卷 一・二・三・四・五』(福武書店 昭和五十年十月・昭和五十一年四月・九月・昭和五十二年三月・十一月)
- 高山利弘氏編著『訓読四部合戦状本平家物語』(有精堂出版 平成七年三月)
- 12 行家の母については、熊野の別当、長快の娘とする伝もある。角田文衛氏『平家後抄―落日後の平家―』(朝日新聞社 昭和五十三年九月) 四十五頁参照。
- 13 新日本古典文学大系『保元物語 平治物語 承久記』(岩波書店 平成七月) 二二・五六頁参照。
- 14 新日本古典文学大系『保元物語 平治物語 承久記』(岩波書店 平成七月) 二二・五六頁参照。
- 15 八条院は、鳥羽院皇女、暲子内親王。以仁王は、八条院の猶子であった。『吾妻鏡』では、治承四年四月二十七日の記事等に、行家が、八条院の蔵人であることが記されている。
- 16 このことについては、源平盛衰記の記述が詳しい(巻第十三「熊野新宮軍」)。ただし、その記述がどの程度の史実を含んでいるのかは定かではない。
- 17 第二中「鳥羽殿ニイタチ走廻事」、「平家ノ使官ノ御所ニ押寄事」参照。
- 18 巻第十三「行家使節」参照。
- 19 諸注の指摘のとおり、「水沢」は「水沢」の誤りであろう。
- 20 後述するが、これは史実とは異なる。そもそも、知盛は大将ではなかったようである。吉田経房の日記、『吉記』には、知盛の出陣は認められず、四部合戦状本、源平盛衰記も同様で、大将は、重衡、維盛であったとしている。
- 21 第三本「十郎蔵人と平家合戦事」参照。
- 22 本来は、「鑑」とあったとも考えられる。
- 23 『平家物語』には記されていないが、『吾妻鏡』によれば、義仲の死後の元暦元年(一一八四)四月、清水冠者は鎌倉を逃れるが、追手によって討たれる。清水冠者は、まさしく犠牲になってしまう。
- 24 第三末「兵衛佐与木曾不和ニ成事」参照。
- 25 日本古典文学大系『保元物語 平治物語』(岩波書店 昭和三十六年七月) 一七一頁参照。
- 26 系譜未詳。名前から、山田二郎重弘と同じく、清和源氏の満政流であるとも考えられる。
- 27 ただし、義仲の許には、行家の他に、行家の兄で、頼朝の軍との合戦にまで及んだ、信太三郎先生義憲(義広)が身を投じている。義憲の方が、行家よりも頼朝との敵対の程度がはなはだしく、石井進氏は、『志田義広の蜂起は果して養和元年の事実か』(『中世の窓』第十一号 成七月) 一〇六頁参照。

- 昭和三十七年十一月。『鎌倉武士の実像』△平凡社選書 昭和六十二年(再録)において、義憲(義広)の行動が、頼朝と義仲の間の不和を招いたのではないかと推測している。この場面、『平家物語』は、諸本揃って、行家については述べているが、義憲の存在は記していない。頼朝と義仲との不和の主因が、事実、義憲の行動であったとすれば、『平家物語』の行家の描かれ方はきわめて物語的であることになる。
- 28 なお、八坂本系に分類される『平家物語』の諸本の中には、行家についての呼称を「備前守」と改めている本もある。桜井陽子氏の御教示による。
- 29 第四「高倉院第四宮可位付給之由事」参照。
- 30 服部幸造氏「信太三郎先生義憲」(『伝承文学研究』第十七号 昭和五十年二月)参照。
- 31 源平盛衰記、および、流布本には、『平家物語』の行家にとって、きわめて重要なこの場面の記述が存在しない。特に、覚一本の流れを汲む流布本に記されていないことが惜しまれる。後述するようなこの場面の性格から、『平家物語』らしくないとして削除されたのか。だが、行家の最期を記す、覚一本の表現はある一面できわめて『平家物語』的なのである。
- 32 この型の表現については、拙稿「軍語りの世界―『記』に対する『話』として」(『国文学 解釈と教材の研究』第四十巻五号 平成七年四月)において言及を行っている。
- 33 松尾葦江氏は、注10に挙げた論稿「『平家物語』―十郎蔵人行家の笑い」の中で、行家のこの笑いに特に注目し、「懸念がふつ切れた、満足の笑い」、「運命を達観した者が自分の能力を見切つて、からんでくる相手をつき放す笑い」、「居直つて相手と対決する笑い」であるとともに、「紆余曲折の人生をしたたかに生きぬいてきた、一個の人間の存在感を放射しているように思われる」と捉えている。松尾氏が捉えた、行家の笑いの意味に異論はなく、何よりも、行家の笑い自体への鋭い着眼に本稿も多大な恩恵を蒙った。その上で、私が重視したいことは、
- 行家の「一個の人間」としての「存在感」それ自体が捉えどころがなく、いわく言いがたいということであり、また、彼の笑いが、そのような「存在感」を強烈に印象付けているということである。
- 34 これまで述べてきた、覚一本の、数、特に「二」という数をめぐる戯れは、覚一本以前にあった記述をもとに、覚一本が意識的に展開したことを考えたい。
- 35 延慶本、長門本では、この後、捕えられた行家が水を所望する場面でも、傷からの流血のことが記される。さらに、行家の斬首の後、首を鎌倉に届ける際、「脳ヲ出シテ、頭ノ中ニ塩ヲコミテ」持たせたということが書かれている(本文は延慶本)。松尾葦江氏は、注10、注33に挙げた論稿の中で、このような記述に注目し、「なまなましいリアリズムが、一種ニヒリスティックな感じさえ与える」と言及している。
- 本稿を成すに当たり、注に示した書籍、論稿の他に、次の書から多大な恩恵を蒙った。
- 平田俊春氏『平家物語の批判的研究 上巻・中巻・下巻』(国書刊行会 平成二年六月)
- 福田晃氏・佐伯真一氏・小林美和氏編、三弥井古典文庫『平家物語 上』(三弥井書店 平成五年三月)
- なお、本稿は、第十三回信州大学人文学部夕べのセミナー(平成七年七月七日)において、「その後姿に何を見るか―『平家物語』と源行家―」と題して口頭で発表した内容をもとに、その内容をふくらませる形で展開した論である。